
異能力と闇と無敵な主人公

哲史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異能力と闇と無敵な主人公

【Nコード】

N5781P

【作者名】

哲史

【あらすじ】

あいつを探す…。

ただの人探しの為にいった異能高校で様々な事件に巻き込まれる…。
五神剣、魔力、魔法、使役召喚、王道具、クラス…そして、

主人公の平島伸行は…最強である。

中二全開です。あしからず。

始まり

五神剣ごしんけん

この世に5本あると言われる、持ち主として【認められれば】神と同等になれると言われる剣。

最早、どこにあるのか分からなくなっている。

異眼いがん

普通の眼とは違う、様々な特性を持った眼。

異眼とは一般的な名称で、眼によって名前が違い、リスクも別。
天魔腕てんまのうで

これも異眼と同じもの。腕によって名称が変わる。
使う腕によりそれぞれのリスク有。

魔力まりよく

様々な魔法・異能力を使う時に消費する力。

これが尽きれば死に至る。

使役・召喚しえき・しょうかん

契約した生物を使い・呼び出すこと。

ただし、召喚した生物に認められない場合…その生物に食われる事もある。

魔神経ましんけい

魔力を使う時に精神を保つ神経。

これが無いと魔力を生産できず、さらに魔力を使った時に、精神を保てなくなる。

他には足や指に特殊な何かが宿っていたり、王クラスの道具を持つ

ていたり

また神クラスの魔法を使えたり、自由自在に雷や嵐を起こしたり…。
あなたは…羨ましいと思いますか？

世立 せりつ にほんみょうじょうがくいたこうとつが 日本明星学院高等部

ここは世界が支援して建てた日本に1つしかない、異能力学園。
ここに一人の男が編入しにやってきた。
校門を見て、そこをくぐる。

ここに来た理由は簡単、昔に出会った少女に17歳になったら明星
に入学すると約束していた。

「ここであいつを…探さなきゃいけないんだ。」

ただ、編入試験は超がつく程の難関。

その分、世界で最強と呼ばれる部類の人間がうじゃうじゃいる。

異能に歳はあまり関係が無いので、先生よりも強い奴も中にはいて、
神クラスの魔法を使う奴や、使役で竜を召喚したりする奴も居ると
聞いた。

ただし、使わなければ異能は衰えていく一方なので、この学園があ
る。

歩いていると、大きな男に出会った。

『お前が、平島伸行か。』

身長は2mを超えているだろう。

「そうですか…。」

ごつめの男は、無愛想に

『俺が試験官のライナスだ。こちらに着いて来い。』

あごで促してくる。

しばらく歩くと、有り得ないくらい大きい広場に出た。

「なんだここ…。」

伸行があっけに取られていると、

男は、ずっと左手を出し魔力を集める。

『close——』

呪文を唱えると大きな結界か何かが中から広場を覆う。

『試験は簡単だ……。俺の膝を地面に着かせろ。』

ごついめの男は構える。

平島伸行……

異眼・使役の使い手。腕も何かがあるらしいが、まだ全容は不明。

王具を限定召喚したり、魔法を使うにしても最高クラス。

何よりまだ認められていないが五神剣の持ち主らしい。

どうしてこいつが今まで隠れていたのか。

直に闇組織が動き出すだろう……。もしかしたら、こいつが救世主になるかもしれない。

ライナスは乾いた唇をぺろつとなめる——

本来ならライナスに詠唱はほぼ要らない。

『楽しませてくれ……。』

ターゲット

そう言っただけライナスは目標の見定め走り出した。

始まり（後書き）

東西南北ついで4人の花嫁も宜しく願います！

闘い

いきなりの出来事に焦る伸行。

ここでやらなきゃ、あいつには会えない。

そう自分に言い聞かせて眼を閉じる。

だてに、今まで修行をしてたわけじゃない。

息を整える、だんだん敵が近づくのが分かる。

——眼を開けた。

『ふッ！』

ライナスは、パチンと手を合わせてこする。

すると、ゴオオツと音をたてて掌に火が現れた。

そして、きゅつとその火を握ると手の全てが炎に包まれていた。

『はあああああああッ。』

その手で、握りこぶしを作り伸行に殴りかかる。

それを見た伸行は、叫ぶ。

…大きな魔術になればなるほど、詠唱はしなくてはならない。

『氷は水から。壁は氷から！』

指を鳴らすと、小さめだが、分厚い氷の壁が出来る。

それは予想通りだと言わんばかりにライナスは珍しく詠唱する。

『rain, flame。』

短いが、意思がはっきり込められている詠唱。

上空から火炎の雨が広範囲で伸行に降り注ぐ。

一撃当たるとそのまま無数の火炎に打たれてアウトだ。

「地から出でるは、無数の岩石。」

詠唱を唱え指を鳴らす。

指を鳴らすことで詠唱を短くしているようだ。

唱えると、地面から大きめの石がぽわっと浮かび上がった。

「迎撃。」

パンと掌を叩く。

岩石はまるで意思があるように動き回り、火炎の雨を丁寧に打ち落とす。

一つの岩石がライナスに向かって飛んでいく。

ライナスはそれを避けきれないと判断して、伸行に炎付きで蹴り返す。

異能は…他の事に集中すると難度の高い技は使えなくなったりするので、雨は止んだ。

しかし、蹴り返したその岩が他の岩の間を縫って、確実に伸行の顔に向かって飛んでいく。

が、伸行はそれを息を思いつきり吐き、炎を沈静化して、手の甲で叩き、砕く。

『なるほど、魔力集中か…。それにしても、二個同時に使うとはな。

』

魔力集中とは、集めたい場所に魔力を集め、何かを起こす事だ。

強い奴は指から魔法や技を使ったりするが、これの応用である。

そして伸行の使った集中と魔術はは、緻密と技能上昇。

緻密は、ものの硬さを高めたり、技能上昇は風の勢いなどを高めるものだ。

油断したライナスを見て、伸行は足を地面にこすり唱える。

これもこすって詠唱を短くする。

「足から起こす、空気の刃。」

ビュンという音と共に見えない刃がライナスを襲う。

入学

ライナスはそれを軽く跳躍し、かわした。

『なら、これどうだ?!』

さらに跳躍し大きく距離をとった。

『The flame that doesn't disappear : to my hammer.』

——消えない炎は我が槌に。

ぼんつと音がすると、ライナスの手には大きなハンマーが握られていて、

槌からは炎があがっていた。

『おらああああアッ!』

その槌を地面に叩き付けると、無数の炎が波のように伸行を襲う。

伸行は避けてみるが、軌道はぶれることなく追跡してくる。

「上位魔法か…?クソっ。」

このままだと詰まれる…伸行は詠唱をしながら炎を避ける。

「一騎当千、千里の道をひた走る。その道に敵は無し。まさに武神の如し……限定召喚、王装。」

手には【冷艶鋸】を持っている。

その昔、関羽が使っていたという武器だ。

それを一振りすると、あっという間に炎が消え去った。

『…凄いな。』

ライナスは驚きを隠せなかった。

王具・持ち主と認められなければ使っ事は勿論出来ない。

まさか、魔力があれば限定だけじゃなくて、関羽自体を呼び出した

りするのか…？

前例がほとんど無い、考えすぎか。

「はぁ、はぁ…。」

伸行の息が荒い。

「うん。特例だが合格だ！」

伸行は特別に合格させてもらった。

「本当か？」

伸行の顔に笑顔が浮かぶ。

「ああ。」

無愛想にライナスは答える、この顔は生まれつきなので仕方が無い。

「やったあああああ！！！」

これから、明星で何かが起こる。

ここに3人の密偵が居る。

「【月光】に連絡しなければ。」

「【正義の騎士団】に今すぐ戻ろう。」

「あれが…平島伸行か。」

出会い

明星に入学した途端外には出れなくなる。

ただ、必要なものは全て校内にある。

コンビニだったりゲーセンだったり、ひとつの町のようになっている。

伸行は転入生。

転入は他の一般入学生とは違い、格段に入学するのが難しいので特別扱いになる。

学費免除は当然、必要なものは全て支給される。

しかし、それは言ってしまうえば籠の中の鳥のさらに籠の中の鳥。

徹底的に管理され、異能の向上にあてられる。

そして、この学園は高等部、中等部、小等部、幼等部の4つがある。英才教育で、総勢3000人の大マンモス学校。

親でも卒業するまでは会うことは出来ないという徹底的な守秘を貫き通している。

『今日からここがお前の家だ。』

あたえられたのは一軒の家。

「嘘…だろ？」

びつくりしたのは伸行、身寄りもないし金も無い…。

入学したのにどうしようと思っていた矢先にこんな待遇。

『本当だ。必要なものは全て揃っている、足りなければ専属の付き人に言え。』

それだけ言ってライナスは消えていった。

ごくりとのを鳴らして、鍵を開けて中に入ろうとする。
すると、中から人が出てきた。

『お帰りなさいませ。では、こちらに。』

一人の金髪美少女に中に引き込まれる。

中に入ると自己紹介をされた。

『私があなた様の専属の付き人、アリアス・レインです。』

アリアスはすつと機械的にお辞儀をする。

伸行はむず痒くて仕方なかった。

あれ？

中には大きなリビングがある。

そこに通されて座らせれる。

『改めて自己紹介させていただきます。アリアス・レインでございます、貴方様の付き人とし…』

先程とたいした差が無いのに丁寧にあやづしてくる。

「貴方様、とか辞めてくれ。」

苦笑いをしながら、伸行は肩をすくめる。

『と、いいますと？』

アリアスは眉ひとつ動かさずに聞き返してくる。

「俺はそんな風と呼ばれる人間じゃないぞ。そんなことより、どうせなら仲良くしたい。」

握手を求める伸行に、アリアスは戸惑っていた。

『しかし…。』

伸ばした手を、アリアスは引っ込めてしまう。

「実はさ…色々と心細かったんだ。」

伸行は、じーっとアリアスの眼を見ながら話す。

『え？』

アリアスは驚いた。

過去にここに連れて来られた人物は皆、自信に溢れていて、実際に実力も凄かった。

その代わり付き人のアリアスなどに目もくれなかったのも事実。

「だから…もつと仲良くしたい。」

伸行の歪みの無いまっすぐとした眼光に、アリアスは嬉しくなった。

「レインは俺の付き人だろう?」

再び手を出す伸行に、

『はい…。』

アリアスはとても嬉しくもあつた。

「一緒に居てくれ。」

おいおい、伸行それは…人にとっては違う意味に。

『え、え?』

ほら、アリアス困ってますよ。

「は・や・く」

照れつつ、手を差し出してる伸行にアリアスは…。

『はい、不束者ですが宜しくお願いします。』

いいんですか、アリアスさん?!!

「ん?こちらこそ。」

ニコツと笑って握手を交わした2人であつた。

決意・危険

そのまま色々話し込み深夜12時過ぎ。

2人とも眠ることにした。

『では、おやすみなさいませ。』

と、アリアスはペコツと頭を下げる。

「うん。って…今俺は、魔力切れ掛かってるから3日以上は寝たま
んまだと思う。」

そう、伸行は入学試験までに魔力をかなり使っていたのだった。

『了承しました。』

そう言つて二人は床についた——というわけではない。

この家には複数の魔術的なトレーニング部屋がある。

アリアスは、そこに入っていく。

…無論アリアスはただの付き人ではない。

人並み以上に魔術は出来る。アリアスの得意なものの一つだ。

トレーニングには魔壁と言われる、普通の家の10倍以上の壁の厚
さに加え

結界を人工的に魔力を取り入れてスイッチを押せば発動させられる。

防音は勿論、歴代のある一定のクラス以上に与えられる部屋なので、
傷一つ付かない。

『はっ、はあああああああ。』

アリアスは今まで誰かの為に力になりたいと思ったことは無かった。
が、初めて人の為に力を振るいたいと思ったのだ。

アリアスの基本魔術：異眼・そして雷を使った超魔術。

残念ながら武具は無いが、自分で雷を剣にしたり槍にしたり出来る

ので特に問題は無い。

しばらく、使っていないかった魔術のために衰えは隠せない。

『それでも、あの人に賭けて見たい。』

深夜に、完全防音の部屋で雷が散る音がこだまする。

結局のところ、伸行はそのあと5日間も目を覚まさなかった。

そう、魔力切れとはそれほどまでに体に負担を与える。

さらに、伸行の場合は特に高等魔術ばかりを使用するので、余計に負荷がかかってしまう。

王具・王装とは特に高位な魔術なので、一歩間違えれば死に至るのだ。

「ふあああ。」

大きなあくびを一つ。

階段を下りて、アリアスが居るかを確認する。

食べ物のおいが食欲を刺激する。

『おはようございます。』

アリアスはありったけの食事を作って待っていた。

リンク（前書き）

お気に入り登録が増えていて、感無量です。

ランク

「食べていいか？なあ、食べていいか？」

子供みたいな伸行を見て、アリアスは頬を緩める。

『どうぞ！』

そう言うと、伸行はガツガツと食べ始めた。

食べ終わると、アリアスは

『伸行様はどの部隊に志願を？』

唐突に口を開く。

「何それ…食えんの？」

きょんとした顔で、アリアスにたずねる。

『何も知らないのに…よく入ろうと思いましたがね、この学園。』

そして、説明を始めた…。

あの学園は1人1人にランク付けをしている。

Z、SSS、SS、S、AAA、AA、A、BBB………Rまで。

そして、このランクは下克上可能なシステムで、

下位のランクのものが、上位のランクのものを倒すと

自分のランクと相手のランクを交換できる、このシステムを【宣戦】という。

ただし、下位のランクのものが負けると、その現在のランクから下へ3つ下がる。

そして、1学期間は宣戦出来ないというリスクもある。

さらにこの学校ではいくつかの自治的組織があり、より強い組織に入ることがステータスになっている。

例えば、SSS、SSが多く集まっている【月光】

ランクよりも、王具、魔具にこだわる【正義の騎士団】
闘いを好む【楽戦】

この部隊にもランクがあり、ナンバーで決められている。

？0・？1・？2…の順で決まっている。

？0【月光】、？1【正義の騎士団】…。

これもランクと同様、5対5の団体戦か1対1の大将戦などで、
宣戦し下克上することが出来る。

しかし負ければ、その部隊から大将クラス以外の1人から引き抜き
が出来る。

部隊の宣戦は毎日でもしてよい、ただ対戦方法は相手が決めるとい
うものだ。

アリアスが話し終えて、伸行を見る。

「…興味が無い。」

伸行は面白くなさそうにアリアスをみる。

『なんとなく、そういうと思いました。』

肩をすくめるアリアスであった。

リンク（後書き）

1 回書いたのが消えて、泣きそうになった。

能力

『氣になっただんですが、伸行様の能力はどのような？』
確かに氣になる事があった。

人にはそれぞれの体にあつた特性などがある。
アリアスなら雷系統がもっとも使いやすい、という感じた。

「うーん。異眼と適当な魔術だな。召喚・使役が一番得意だと思う。
」
そう伸行の特性は属性なし。
なので、決まった属性系統は特に無い。

その分たくさん魔術を使うので魔力の減りにバラつきが有り、とてもしんどい。

そして、魔力の貯蔵量も並ではないので回復も遅い。

『召喚・使役ですか…主にどのようなものを召喚したりするのですか？』

異眼を所有している人は結構いたりするが、使役召喚を主にするのは珍しい。

召喚・使役といってもその種類は何種類もある。

未確認種・伸行のように古来の武器・動物・場所・神にまつわる物・現代の武器など…。

特に未確認種だったり神にまつわるものだったり
古来の英雄が使っていた武器などは最強クラスといっても過言ではない。

「古来の武器が殆どだけど、未確認種も2体か…後は神クラスものがほんのちよつとだけ。でも、場所とかは召喚できないし、使うと

魔力の減りがひどいからあまり使わない。」

アリアスはとんでもないほど、驚いた。

この伸行の体にどれほどの魔力が貯蔵されているのか真剣に気になった。

『まさか…実際にいるとは。』

実際、神クラスを召喚する人はこの学園にもいたりする。

しかし、こんな身近にいるとは思いつかなかったのだ。

「??」

理解できないといった顔をしている伸行。

『いえ…それで、異眼はどんな異眼を?』

使役・召喚のエキスパートみたいなので、異眼も凄いものではないかと気になった。

だが、異眼も一応その体に不適合だった場合。

最悪失明などもするそこそこ危険な代物だ。

「これは使い物にならない。」

眼を指差しはつきりと言う伸行。

『使い物にならない?』

これにも、アリアスは驚いた。

異眼は本来もの凄く使えるのだ。

実際中には【神殺しの魔法の眼】と呼ばれる代物もあったり【Ice pickle《氷漬け》】

と呼ばれたりするものもある。

「そのうち使う時が来るだろう…な。あんまり使いたくないけど。顔をぐしゃぐしゃに歪めて、嫌な事をアピールする。」

「アリアスの能力は?」

今度はこちらの番というように、伸行は息を巻く。

『…試してみますか？』

アリアスは、伸行の力を見たくなった。

「でも、学校は？」

伸行の皮膚に鳥肌が勝手にぶつぶつと出来ていた。

『春休みです。』

綺麗なグリーンの瞳をアリアスはキラんと輝かせる。

…結局伸行を引っ張って、トレーニング室に入ってしまった。

能力（後書き）

次は戦闘になると思います。

お気に入り登録ありがとうございます！！

スタート

「本気でするんだな？」

伸行は、何回も確認をする。

『ええ、安心してください。ここは何があっても壊れたりしません。』

そんな心配はしてない、と伸行は思う。

そう…先程から、アリアスの周りがバチバチと変な音がするのだ。

『ルールは簡単。一撃を先に加えた方の勝利、いいですね？』

…あれ、勝利になってる？手合わせ…だよな？そくだよね？

『でわ、10秒後スタートです。』

もうやるしかない、伸行は距離をとる。

アリアスは特性が雷なので雷を使う分には、高位魔術で無い限り詠唱が殆どいらぬ。

魔術というか、異能寄りなのでライナスよりも遥かに自由自在だ。

そして、アリアスのもう一つの特珠な能力、異眼。

異眼名【Repetition《繰り返し》】

例えばだが、さっき落雷を落としたとして、アリアスが異眼発動をしたとする。

すると、その技がそっくり同じ場所に起きるといふものだ。

異眼発動とは魔力を眼に通し、発動することだ。

『スタート。』

アリアスの声が大きな部屋に響く。

『まずは、こちらから…どうぞっ！！』

右手を高くあげる、すると有り得ない量の電気が集まっている。

それを、ためらいも無く超高速で、打ち出す。

「詠唱無しであんな高位な異能いいのかっ…よ…!」
反発を使うしかない、足に魔力を込める。

「おらああああああっ!!」

ありったけの力を込めてアリアスめがけて、蹴り返す。

—— シュン

と音をたてアリアスはその雷の玉を吸収する。

「そういうことね、なら…：：：降り続くは氷柱の剣。」

部屋が冷気によってとてつもなく、寒くなる。

伸行は、指を鳴らした。

お互いが、手合わせではなくなっている。

アリアスは体の周りに複数の雷の剣を用意しており、氷柱の全てを斬ろうとしている。

いくつもの氷柱がアリアスを襲う。

サンダーバード（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

サンダーバード

瞬きをする。

自然の動作で、眼を開ける。

あれ程あつた氷柱…は地面に落ちて跡形も無く全てなくなっていた。

「かかったな。伸びよ、そして捕まえろ…伸氷しんひょうの植物」

ずっと伸行は短めな詠唱をする。

すると、地面から氷が意思を持ったようにアリアスの足を絡め取る
うとする。

『甘いですよ。』

絡めとろうする氷の触手を雷を纏い触れさせない。

「ツち…。」

一度2人とも距離をとる。

アリアスは、今回の戦闘で初めて詠唱を使うことを決めた。

『その羽は雷、その目は炎。来い…雷の精霊』

ちかつと部屋全体光に包まれる。

伸行は現れたものに、驚いた。

「なんじゃ…そりゃあああああああああ！！」

体長は5mあるうか？！

大きな雷を纏っていて、目は炎のように赤い鳥が目の前にいるのだ。

『サンダーバードです。』

淡々と言うアリアス。

「未確認種じゃねえか…。」

伸行もすかさず詠唱をし始める。

…が。

『Repetition。』

アリアスがそういつて目に魔力をとおすと、

先程の大きな球が先程と同じように伸行を狙う。

「ふんっ。」

今度は掌を使つて威力を削りながら交代していく。

また、弾き返しても結局アリアスが吸収してしまうし

雷の玉を反らしたとしても追撃されては意味が無い。

「…いい事思いついた。」

普通の人が見れば1歩下がりながら、玉を無力化したように見える。
そして、目の前に迫る雷の鳥を見ながら…そう呟いた伸行だった。

雷切

「サンダーバード…鳥なら…」

伸行は右手に魔力を込める。

一瞬でいい、少しでも動きを鈍らせるだけでこの鳳おおとりを叩き潰せる。

『無駄ですよ。』

Repetitionより詠唱無しで術を使う方が魔力の減りが多いのだが仕方が無い。

雷玉を無数に空中に浮かばさせる。

アリスは気付かなかった。

サンダーバードの突撃と雷球包囲で完全に勝ったと思っていたのだ。もう鳥と伸行の距離は5mも無い。

「伸びろ、増えろ！」

短く詠唱する。

すると、先程破壊したはずの氷の植物は一瞬で大きくなってサンダーバードを絡め取る。

『しまった…弾けサンダーバード…!!』

サンダーバードはそれを聞くと、今まで以上の力でその植物を破壊しようとする。

「潰せ。」

そう告げると同時に、植物はサンダーバードを氷で覆う。

…パキンと音がするとサンダーバードと植物は跡形も無く居なくなっていた。

それはまさに、一瞬の出来事。

『まだ、包囲雷球が残ってる。』

アリアスは頭をすぐに切り替えて、伸行と雷玉の位置を確認しようとする。

球を操るには再び魔力をそこに流し込み操るのが、

サンダーバードを潰された事により上手く魔力が通らない。

異能力は精神面が、かなり重要なので圧倒的有利でもいつ不利になるのか分らない。

伸行はそこを何より見逃さなかった。

いまなら詠唱しきれると判断したのだ。

「戸次道雪より使われ、雷神を斬りし刀。…雷切！」

ぶんと音をたてて、刀を一振りすると…。

戸次 道雪（前書き）

お気に入り登録15人越え!!!
ありがとうございます！

戸次 道雪

無音。

雷玉は1つも残らず消えていった。

『なっ…、Repetition!!』

アリアスはすかさず異眼に魔力をとおしサンダーバードを復元させる。

異眼は扱いやすいのが特徴であり、何より精神面があまり関係ない。Repetitionの弱点は出した後再び魔力を通して操作しなければ単調になってしまう事。

魔力を再びとおすのは実は結構難しく、今のアリアスの魔神経の状態なら詠唱無しでも少し時間がかかる。それを分かっているのか、

伸行は今まで居た場所からジャンプして離れ、魔力を通さなければならぬ状態に持つて行った。

更に今、常人から見れば分からないが、先程に比べるとサンダーバードのスピードは明らかに遅い。伸行が詠唱するのに充分な時間と場所。バツと大きく跳躍、距離をとる。

「枉^まげろ、増加を刹那に起こせ…雷切よ、増えろおおおおおッ
!!!」

そういうと、雷切が2本に増えて手元に収まった。

『馬鹿な…。複眼?!』

アリアスは魔力の操作を誤り、サンダーバードは元の軌道から大きく反れた。

「このチャンス、生かす。」

そういうと伸行は、刀を2本とも地面に刺した。

バチバチと有り得ないほどの音がする。

「戦国時代の雷神…、戸次道雪よ。道理を捻じ曲げ今この場で姿を現せ。」

詠唱する間に近づく、鳳とのわずかに距離3m。

詠唱しきって——1秒後

目がおかしくなりそうな光が辺りを包む。

しばらくして視力が回復してきた。

しかし、アリアスは回復したはずの目を疑う。

信じられない、いや信じたくない事実がその場で起きていた。

『信じたくないですが、そんな規格外のものを…召喚するんですか…貴方様の召喚使役は…。』

大變

アリアスの声は伸行には届いてない。

「頼むな、道雪。」

道雪は下半身不随と言い伝えられいたが、違う。

びんぴんしている。

『御意!』

道雪が刀を天にかざす。

全てが光に包まれる。

「うまくかかってくれよ…。」

伸行の声は聞こえず、アリアスは立ちすくんでいる。

光が消える。

「取った。」

伸行はアリアスのデコにデコピンをした。

『は…!』

アリアスはデコを両手で抑える。

結局、伸行の勝ちで終わったのだがアリアスは釈然としていない。

アリアスが終わった後、伸行の召喚使役を

本当に凄い! 凄い! と思っていたのだが、伸行が言うには

「召喚できるわけ…無いだろ、光を使って幻想をみせたただけ。」

そう言っ取り合ってはくれない。

明日から、学園生活が始まる。

伸行のランクを冷静に判断してみる、明日はクラス発表とランク付け。

そしてそれは…判断できなかった。

ただ明日のランク付けを見るだけだ。

『凄いな……。』

光で作ったとしても、それは本当に凄い事だった。

伸行は自室に居た。

「光であんなもん出せるわけねえよな。」

ポツリと呟く。

今は異能に関しても、異眼に関しても黙っておく必要があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5781p/>

異能力と闇と無敵な主人公

2011年2月1日16時10分発行